



特定非営利活動法人
自然文化誌研究会 会報誌



特別号

2020 年 5 月 10 日発行号

特別号として発行しました！！

コロナウィルスによる影響で、本会でも主催事業の開催が難しい年となっています。

既に「野草の天ぷらとお茶つみの会」「冒険学校むらまつりキャンプ」は中止とさせていただき、共催事業の「ちえのわ農学校」も 4 月からの開始を見合わせ、初回の開催を探っています。

主催事業の収入が無ければ、本会の通常の運営が難しいことも多々あります。そのため、印刷・発送の経費削減と、実際に報告・募集できる主催事業もしばらくお休みなので、会報ナマステも 5 月 10 日予定号はお休みにさせていただき、Web 版でホームページに掲載しようという提案がありました。

Web 版であれば、ページ数や印刷代も気にする必要はないので、自由に書いてみようという趣旨です。

現在進行形で、いつもよりも自由な寄稿になりますが、楽しんでいただければ！と思います。

寄稿があり次第、随時加えていく予定です。

(事務局 黒澤)

○2020 年の活動予定のお知らせ

※ 開催できるとよいのですが・・・開催と中止については検討しています。一つずつ決めていきます。

8/2-8 『こすげ冒険学校』 @小菅村 6泊7日

9/26-27 『INCHまつり』 @小菅村 日帰り or 1泊

12/26-28 『冒険学校 まふゆのキャンプ』 @小菅村 2泊3日



ナマステ 特別号

特定非営利活動法人 自然文化誌研究会 会報誌

<発行日> 2020 年 5 月 10 日

<編集> 自然文化誌研究会 事務局

<発行> 特定非営利活動法人

自然文化誌研究会

The Institute of Natural and Cultural History

<事務局> 〒409-0211 山梨県北都留郡小菅村 3337-2

TEL : 0428-87-0165・090-3334-5328 (事務局黒澤)

E-mail : npo-inch@wine.plala.or.jp

H P : <http://www2.plala.or.jp/npo-inch/>

2020 とても長い春休み、中間報告？

佐伯 順弘

1. ある学校の状況

2月27日 安倍首相より「全国の小中高特別支援学校に対して3月2日より春休みまで臨時休校とする」よう要請が出る。それを聞いた時の職場の様子については詳細に記述したいのだが、守秘義務違反などに抵触するのも困るし、前科もあるので控えておく。3月17日、卒業式が11日遅れで実施される。その時の学校及び保護者の対応については一言二言どころではなく、2～300言あると言えばあるがこれも面倒なことになるといやなので控える。更に4月7日、入学式が新入生及び保護者、1年生関係職員のみで実施される。来賓、2、3年生担当所員は会場に入らず。

そして、翌日から4月19日まで休校延長。そして、4月20日から5月6日まで休校延長。さらに5月末日まで休校延長。

国及び自治体による、これらの措置について特に異議はない。既に近隣の市町ではCOVID-19が広がっており、感染の隠ぺいではないかと判断できる事例も発生していた。様々な対応については能力からすれば妥当なものである。

そのような環境の中、差し障りのないところで一教師の行動と生活環境についてお知らせしたい。

実のところ、「先生は暇になっていいね。」などと言われることについては我慢ならない。他の教員については特にコメントしないが、全員に対して「暇」だと言われることについては我慢ならない。「だって、早く帰って来ているでしょ。」おいおい、定時帰宅ができないこと、サービス残業、奴隷働きが標準のブラック体質が問題だっただけで、時間内に業務を済ませて退勤することは決して悪ではないはずだ。これまでは退勤時刻を1時間過ぎても生徒は学校にいたのだ。それをそのままにして帰ることなどできるはずがないではないか。現在生徒がいないのに、こんなに忙しくて退勤時刻を守るのが精一杯というのは、時間内に終えることが物理的に不可能な量の業務を抱えていたという証明である。他にもキツイ仕事はたくさんあるだろう。教員なんか甘えているんじゃないかという声も聞こえてくる。今回の混乱の影響で存続すら難しい企業がたくさんあるのになんの心配もないじゃないかという声も聞こえてくる。いやいや、日常的に何をやっても叩かれ、非難の矢面に立たされ、法律的に奴隷働きが規定されて（特給法及び改正特給法）いる分込みで、この職業なのだからこういう時だけ、非難

されるのは承服しかねる。過去にもこういった理不尽な言われ方はあった。この職についての初任給は手取りで10万円もなかった。学生のときには2週間で15万円稼いでいたのに、1か月、土日もなく、女の子からの誘いも断り、夜10時過ぎまで働いているのに学生バイトの2週間分の稼ぎもない時、高校の知り合い（決して友人とは呼ばない。）はボーナスを100万もらっていた。「どんな職に就くからだ。」と散々いってくれた彼もバブル崩壊の影響を受けた時、「公務員いいよな。」と言いつけて。我々は景気がよくなってもほとんど給料は上がらないが景気が悪くなると給料下げられるのに勝手なことというものだ。それでも、自分の身を削り、人様の子供の学力が伸びれば心底喜び、弱小チームが勝てば苦労が報われた気がした。給料をもらっておきながら、目的は金ではない。そういう人間が集まってくるから、好きなだけ使われてしまうのだ。団体交渉権も最初から奪われているので、状況を好転させることなどできるはずもないのだ。しかし、今回のような状況の時は実に堅牢な業種である。学校がつぶれるとかこちらの不幸事でもないのに解雇されるとかそういった心配はまずない。結局のところ、何を言っても安全地帯からのヒットアンドアウェイであり、大多数の人々には賛同を得られないことも自明である。そういう立場からのお気楽極楽なコメントでしかないということだ。

さて、つまらん話が続いた。で、次は面白い話かというところでもない。結局、生徒がいなくても私は忙しいということだ。しかし、その忙しさはそれほどいやでもない。受け身の忙しさではなく、攻めの忙しさだからだ。さて、積み残しの授業がある。そして、新学期も2か月授業なしだということだ。なんとかしなければならぬ。幸い同じ職場には信頼できる上司やただ口を開けて待っているだけでない同僚が少しはいた。上司はもう一段階上から、できることはとりあえずできるだけやっていたという言質を取ってきた。家でできる学習プリント作成、有名動画サイトでの授業公開、手分けして生徒宅への配送。接触を避けるために手渡しではなくポストインである。（ここで新しい事実を知ることになる。ほとんどの家庭でA4サイズの封筒を受け入れるポストは装備していない。また、おしゃれなポストで入れ方がわからないポストが少なくない。そして、防犯対策なのかポストに氏名がない、表札がない家があまりに多い。今はこういうことになっているのだ。全く知らなかった。教員は世間知らずとまた謗られることだろう。一人の例をもって全体を貶めるのはいかかかものかと思うが。）

さらには、ややスタートが遅いが、有名どころのネット会議システムでの授業を始める。最近の大学生はほとんどそういったネット環境を整えているようだが、中学

生となるとそうでない環境に置かれている生徒も少なくない。将来的にさえそういう環境を手に入れられないと思われる場合もある。ここでははっきりと経済力が学力に与える影響は小さくないと確認する。中学生でPCによるネット環境が整っている生徒とそうでない生徒がいる。何とかデジカメやビデオカメラをWebカメラに流用してネット会議システムに入る技術力のある生徒若しくは保護者とそうでない場合。このどうしようもない格差。どうにも埋められない。そして、それは教育の公平性を保証できないということでストップがかかるのがこの業界の基本である。しかし、今回の場合には、最上層部から「できるだけことをしている」という承認を取ることができたため、動いているわけである。鄧小平時代の「富むことのできる者から富め」という言葉を思い出した。思想的にはそんなに関係ないと思うが。

そんなわけで、とにかくできることはないかと考え、実行に移すのは楽しい。誰でもそうだが、言われてやるのと言われてやるのは天と地ほど違うのだ。

というわけで、生徒がいて普通に授業をした方が平和な気がする。ただ拘束時間は長くなり、労働時間が無期限なのはいただけないが。そんな風に感じるのは長年の奴隷生活に慣れ過ぎたからか。これを書いている5月上旬。5月31日までが休校ということになっているが、状況によってどう転ぶかわからない。それでも、6月1日から再開だと想定して準備をしていかななくてはならない。9月入学式とかいう話も出てきている。それでも今できることをできるだけやるというのが、私にとって最も心の平穏を保つことのできる考え方である。そして、いつになるかわからないが、たぶん訪れるであろう学校再開。戦いも、株も、休校も始める時より終える時の方が難しい。だが、せいぜい軍曹どまりの自分にとってはそういう政治的なものを考える役割が回ってこないだけ幸せなことだと思う。

2. 自然文化誌研究会 冒険学校について

そんな些細なことよりももっと重視していかななくてはならないのが「自然文化誌研究会」の行く末である。私にとってこれが重要である。

5月の冒険学校が無くなり、夏の冒険学校も困難。そして、INCH-Fes.はどうなるのか。真冬のキャンプへの影響も避けられないであろう。こうした1年間の空白によって今後の冒険学校にどんな影響が出てくるのかを考えなければいけないのではないかと。文章や口頭による知識や技術の伝承ではなく、様々仲間と関わり、自ら経験することにより気づかされたり、開発されたり、習得されたりする「能力」（流行なので非認知能力という言葉

葉は使わない。）が高められないのではないかと。それは冒険学校としてより質の高いものを目指そうとする現段階においてやはり痛手なのだ。新社会人になったばかりのメンバーに参加をしてもらうことは簡単ではなく、今まで積み上げてきたもの、繋いできたものが綻んでいくのではないかと危惧している。一方でその程度で消滅するものならばそれでいい。残るものはあるはずという楽観もなくはない。どのようなことに対しても、「深刻になるな、真剣になれ。」である。

COVID-19に対する治療法が確立するか、第2波、第3波への対応を間違わなければ、おそらく来年の5月の冒険学校は実施できるだろう。しかし、治療法は確立せず、第2波にすら対応を間違える可能性は十分ある。（実のところ、来年のオリンピックが実施できるなどとは思っていない。）そうなった場合、自然文化誌研究会の活動に2年間程度の空白が生まれることになる。そうした場合、我々の活動文化の継承はどうなるのか若干心配になってくる。ただ、若干である。自分の場合を考えても、冒険探検部において、元ワングルの岩谷から学んだことは確かに少なくないが、野外行動技術のほとんどは独学であり、経験の中で確認、修正、向上してきたものである。また、集団行動の源流である軍事行動・作戦行動への興味からそういった方面の知識は小中学生のころから身につけてきた。また、職業柄「指導」の面についてもその戦略・戦術についてはある程度身につけてきた。木工、金工、竹細工、各種野遊びは保育園児の頃から祖父・父によって実践的に鍛えられてきた。このようなわけで、冒険学校が実施されない空白の時間があつたからと言って、全く何もできないとは思わないが、やはり冒険学校独特の雰囲気や「自然界と人間界のインタープリター」を育成するという観点、他人と交流したり、自己開示したりする観点からは冒険学校での経験が重要になってくる。

そこで、ここでも「できることをできるだけ」、「深刻になるのではなく、真剣になれ」ということで、いくつかの企画を提案したい。（もちろん、寝言の延長なのでそれほど深刻に受け取っていただかなくてもいいけれど、寝言の割には、本人はかなり真剣である。）

（その1）今こそ、ネット飲み会！

誰かの後追いをしたり、流行に乗ったりするのは好きではないけれど、そもそもネット飲み会は8年以上前からやっていたので、マネしたわけではない。台湾に住んでいた時、日本の友達とよくやっていたのだ。そこで、今年度から始まるはずだった、冒険学校セミナー（名前は知らないけど、そういったイメージのもの）を行うのである。もちろん、酒を飲みながらでいい。月に1回か、隔週か、一応期日だけ決めておいて、参加できる人だけ

で行う。途中参加も途中退出もあり。講師と調整役だけ決めておいて、気楽に楽しく。できれば、テキストは事前にダウンロードできるようにしておきたい。そこで、質疑応答もできるし、新しい発想も生まれるかもしれないし、何より顔がわかったり、考え方や話し方がわかったりするから、冒険学校が再開された時の入り方が円滑になる。スタッフと冒険学校の参加者が個別につながるのにはよくないが、スタッフやスタッフ予備軍が集団の雰囲気慣れしていくことはとても大切だと思う。

（その2）読書と作文のススメ

中身は簡単。活動していく上で、もしくは学生としてこれは読んでおいてほしいという本の紹介をどんな形でいいからする。ネット飲み会の場でも構わない。それについての意見交換会（いわゆる読書会みたいなもの）をできたらいい。また、こういった文章を広く募集してお互いが読めるようにする。書いてみると自分の考えを整理できるし、じっくり相手に伝えることもできる。話す方が得意という人、書く方が得意という人、それぞれの表現について得手不得手があるけれど文字として残ると責任も出てくるし、よく考えるのでいいかなと。あと、今やっておきたいのは、工作手引書、応急手当手引書、集団料理手引書などの冒険学校の財産として残るようなファイルができるといいと思っている。

（その3）あたらしい活動

できない時こそ、出来るようになったらやりたいという発想が生まれることも多い。寝言レベルで構わないからこういうことやってみたいというのと伝え合うことも大切ではないかと。今やりたいのが、竹林に関わる里山活用。

放置竹林のせいで、山が荒れているところは地元にも多い。自分所有の竹林もあまり整備されているとは言えないが、今ちょうど整備しているので余計そう思った。冒険学校で竹細工をやるけれど、その竹を黒澤さんに確保しておいてもらうというのは甘え過ぎではないか。参加者自らが採りに行くべきでは？もしくは、そのプログラムを行うスタッフが採りに行くべきでは？（あ、俺か。）INCH-Fes.か、真冬のキャンプか、11月ころに入れる冒険学校セミナーに合わせて、竹林整備を行う。赤字の会の財政はさておき竹チップperを購入して（もちろん、村の森林組合で貸してもらえたらそれが一番いい。）伐採した竹を粉碎して竹林にまく。竹細工に使う分、たき火で燃やしてしまう分は確保。整備した竹林には筍も良く生えるから5月の冒険学校では筍掘り。5月か、夏の冒険学校では程よく乾いた竹で工作。余ったら全部燃やす。竹明りにする場合は、青竹をその時に伐採してくる。放置竹林の整備に手が回らない家も多いはずだから、少しでも日当を出してもらって竹チップperレンタ

ル代などに充てる。こちらは、竹資材、竹燃料、筍、経験値、いくらかの金銭が手に入り、放置竹林の持ち主はそれほど高くない料金で、竹林を整備してもらえ。まさにwin-winである。

竹林整備事業はたぶんどこでもやっている。

3. 大型連休までの私の活動

テレビ・ラジオを付ければ、「ストレスに負けるな。」「コロナに負けるな。」という言葉ばかり聞く。いやいや、すいません全くストレスないんですけど。寧ろそういう決めつけがストレスなんですけど……。家にばかりいてストレス？家って安らぎの場では？運動不足？全くありません。自重筋トレは基本。自転車をローラー台にセットして2時間も漕げば汗だく。読まなきゃいけない本や読みたい本が山ほどある。作ってみたい料理もお菓子もたくさんある。休日前の夜には飲む酒やそれに合わせるつまみなどを考えてセットして、ただ味わう。部屋の片づけ、ギターの練習、栽培する植物の世話……。

全く暇などない。さらに……。

5月4日某運送会社の支店留で荷物が届く。



箱から出して、組み立てるのが一苦労。海外製なので、ネジ一つにしても加工が甘い。それを修正しつつ、組み上げる。素人にはできません。約 90kg の重量があるため、作業が大変。竹林に持って行くのに全力を使い果たす。



爆音とともに、竹が粉碎されていく。



こんな具合に竹が粉碎されるのは気持ちがいい。連休はいい酒、いいつまみ、いい作業。

コシアブラを取りに行けなかったのが、残念だったが、暇とは無縁の充実した連休でした。

人生の小さな転機について

事務局としてではなく、稚拙な一人の人間として 黒澤友彦

「新しい生活様式」という言葉が示された。田舎暮らしとか、環境学習が勧められるのかと期待していたら、日常生活における単なる注意事項の羅列で期待外れだった。個人的には、田舎暮らしが声高に叫ばれるたびに自分が褒められているようで、安定しない職業にある自分の心や立ち位置に自信が持てるようになるのだが・・・。

「新しい生活様式」という言葉をもう少し掘り下げてみる。

今回はコロナウィルスによる様々な影響が発端であり、根本的なきっかけは自発的でない～そりゃそうだ、日常生活にそれなりに満足して生きているのならば、そのまま継続でかまわない。かまわなかっただろう。

この現状、将来像を、専門的な立場の意見を選択整理しながら、自分の脳ミソで決めることが大事だなと思う。科学的に正しい情報を入手した上でどのような生活様式をイメージするのか？

日常生活では「いつの間にか新しい生活様式に変わっている」という言い方が正しいか。明日からの田舎暮らしではなく、選ぶ情報の選択、選ぶ野菜の選択、選ぶ旅先の選択・・・日々の小さな具体的な物事の積み重ねがいつの間にか人を変化させる訳で、人は急には変わらない、変わらない。

これは人間性の欠点を改善する時も同じで、明日からやさしい人間に、落ち着いた人間に、思慮深い人間に・・・なれる訳がない。人は急には変わらない、変わらない。

とりあえず第一歩目としては、「早起きをする」「挨拶をする」「怒る前に深呼吸」など、具体的な物事の積み重ねで人間性もいつの間にか変化しているというのが正しいと思う。簡単に言えば、日々の心がけということか。

あえて恥ずかしさも覚えながら、最近の自分に起きた転機を書いてみる。内容は低俗でくだらない。自分が率先して恥を晒すことで、相手も心を許してくれるのならば、あえて恥をかこうではないか。ピエロでかまわない。

人生の小さな転機①

2017年12月（40歳5か月） 「20年間吸い続けたタバコをやめた」

と、ようやく言ってもよいだろう。

この数年前に2万円の費用を掛けて禁煙外来に通ってみたもののやめることはできなかった。

やめることができた原因は電子タバコのおかげである（私が吸っていたのは glo という加熱式の電子タバコ）。

この電子タバコ、チェーンスモーキングの自分にとって厄介なことに、常に充電が必要だった。

パチンコ屋にて、最近のパチンコ屋は、各台にUSBの充電ジャックがある。電子タバコをUSBケーブルで充電しながら吸い、パチンコをする・・・USBから繋がれた電気を電子タバコを通して煙に変換し、それを吸いながらでないと生きられないような気持ち悪さを感じた。

だからといってタバコ依存症の人間が簡単にタバコをやめることにはならない。

この glo って電子タバコ。自宅にて、便器に落として流してしまい、庭の下水管を開けて発見したこともある。もちろん壊れたが、それよりも下水管を詰まらせなくてホッとしたもんだ。

転機は来る。この年の12月に入って忘年化と称し、4日連続で飲み会があった。既に二日酔い？三日酔い？酒が抜けずに気持ち悪い。そんな時に、 glo が壊れた。村内では本体が手に入らないので、仕方なく、以前に吸っていた紙巻のタバコを購入した・・・この電子タバコに慣れると、今まで吸っていた紙巻のタバコが臭く

て不味い。

二日酔いもプラスされてだが・・・タバコが不味いのだ。こんなに不味いのなら別に吸わなくていいや、と過ごして3～4日・・・何だかよくわかんねえけど、タバコ要らねえな。しばらく止してみるかな、と過ごすうちに、年末の「冒険学校まふゆのキャンプ」、都内での忘年会、そして正月を迎え、タバコを吸わなかった。

そのままヤメてしまって現在に至る、何の努力もしていない。今現在で2年5か月の間吸っていない。夢ではちょくちょく吸っている。酔って記憶が飛んだ時も、貰って吸っていないらしい。

たばこ・タバコ・煙草。今でも良いイメージを感じる。旨い・大人・深い思考・文化・コーヒー・推理・張り込み・麻雀・パチンコ・・・様々なポジティブな言葉が連想される。

幼少期は、父のおつかいでタバコを買いに行った。お釣りを小遣いにくれたから喜んで買いに行った。

冒険探検部の部室では、海外から帰ってきた先輩たちが異国のタバコを持ち帰っており、みんなでよく味わったなあ。「珍しいタバコを吸うよりも普通のタバコを吸った方がいい、西表島でも与那国島でも（小菅村でも！）日本のどこでも手に入るノーマルなタバコがいいんだよ」みたいなことも話したり。

今もタバコは値上がりが続く、「煙になって消える高級な嗜好品」である。吸っている時は何にも思わなかったけれど、ヤメた今となっては勿体なくて手が出ない。そんな経済的なこともあり、もうタバコに手を出さないかな。耐えられないストレスを抱えたときは、別のストレス解消方法を調べるかな。

（参考） 20年間のたばこ代（1箱250～440円の期間、1箱当たりの値段を真ん中の345円として）
 $365（日） \times 20（年） \times 345（円） \times 2（箱） = 5,037,000 円$ 500万円オーバー！！

吸ってきた20年間は惰性でしかないが、「旨かった」と胸を張って言える。

もしも20歳に戻ったら吸わない。500万円を煙に変える訳にはいかない。

そしてこの禁煙は、自分の力で勝ち得たものではなく、偶然によるものだった。幸運に感謝！！

（小話）

パチンコ屋の営業、休業要請をニュースで観る。この機会にパチンコ屋が物理的に減ること、経営が厳しくなり、サービスできなくなることは、元々減り続けている遊戯人口をさらに減らすことになる。理由はWebで調べればすぐ出るが大きく3つ

- ① 遊戯人口の減少・・・若い人はパチンコ以外にたくさん遊びがあるよね！
- ② 依存症対策のためのマイルド化・・・勝てなくなる、刺激がなくなる、即ち経営的に悪循環
- ③ オリンピック誘致も含めた禁煙の強化。

ということで、萎み始めているこの業界。大手は、カジノへの移行など別の業種にも動き始めている。

でも根本的に「娯楽」とは言え、「負ける人のお金で成り立つ」業種なんだよね。サービスといえばサービス業。エンターテインメントと言うならば遊園地と同じ部分も多く、ギャンブルというならば、競馬、競輪、toto、宝くじも同じ。

グレーだから楽しい世界。大人の世界？込み合っているのに逆に一人になれる空間。タバコを堂々と吸える空間。

依存症の人たちの荒い金遣いで成り立つ空間。適度なギャンブルなんて存在しないでしょ。

なので、だんだんと萎んで無くなってしまふことは仕方のない時代。従業員の方は職替えしていくしかないんだろうなあ。時代だから仕方のないでしょ？それこそコロナ以前から考えるべき「新しい生活様式」なんじゃないかな。

次の転機は自分史にとっては最大の出来事の一つだが、他人にとってはどうでもいい話。人と他人の距離はそんなもんだよね。分かってくれなくてOK！という、物事もたくさんある訳で・・・。

人生小さな転機②

2019年2月（41歳7か月） 「パチンコ・スロットを引退した（ヤメた）」

今冷静に思うと依存症の期間もあった。26歳時に小菅村へ（自分の意志ではなく）移住した際に、都会の文化とは物理的に距離を取ることになった（強制隔離）。その後、青梅へ行くと言えばパチンコ屋に行っていた訳で、覚えてから17年ぐらい熱心に通い続けたもんだ。たくさんのお布施をして、その代わりに脳汁を垂れ流していた。高い脳汁代金だ。

これもまた面白い娯楽で、大の大人が勝ち負けのみならず、コンピューターに制御された熱い演出で一喜一憂し、脳汁が出る。だからたくさんお金を使う。使っていけないお金まで使ってしまう。約束を破る。精神が荒れる。そして依存症になり、社会的な問題になる。

「勝っている」という人も年間、生涯収支となれば、8割以上の人が負けていると言われている。

それはそうだろう。駅前の一等地、郊外の大規模店舗などが経営されるためのその費用の全てを客の負け分で賄っている訳だ。

一般的にパチンコ屋の還元率は85～90%の薄利多売と言われている。85～90%はお客さん全体に戻す分。10～15%で土地、機械代、電気代、従業員経費、利潤を賄っていると言われているサービス業である。

競馬は還元率75%と言われている。パチンコ屋よりもトータルで勝つのは難しいとされている。カジノは95%と言われている。

宝くじは還元率50%。これは既にギャンブルではない。夢という商品という認識の方が良い。だからこそ、社会福祉協議会やら小菅村営バスもそうだが「宝くじ号」なる寄贈車がある訳で、ギャンブル好きとしては逆に言えば、宝くじなんて絶対に手を出さないジャンルとも言える。

ギャンブルとして考えた場合はパチンコよりも宝くじの方が明らかに「愚」。だけど宝くじの依存症はあんまりいないから好きな人は「夢」を買い続けられればいい。

麻雀も最近はお金を掛けないプロが存在してリーグ戦をしたり（Mリーグ）、クリアなイメージになってきている。パブリックビューイングとか六本木で開催したりもする（チケット代8,500円払って観に行きました）。

麻雀もパチンコも勝つための方法があって、勝っている人たちが共通して言うことは、「収支（表）を付けること」である。

「収支表を付けてない人はその時点で勝っている人はいない」というのは定説でもある。「客観的な数値で判断しましょうね」という分かりやすい話でもある。客観的な事実が無いと感覚だけで不都合な事実を目を瞑ってしまうわけだ。これはギャンブルだけでなく、人生にも共通することでもあると思う。

私は言い訳として、-2～3万円/月で、年間-24～30万円ぐらいなら、負けても趣味としてOK（趣味としてならば負けではない）と考えたりもしていた。収支表は2006年から13年間、全て付けている。逆に言えば、17年間のうちの最初の4年間の収支表は存在しない訳で、依存症である証拠でもあるし、どんだけ負けていたんだと恐ろしくもなる。

とか何とか言いながらお布施（負け）を続けていたのだが、転機は来る。ある時を境に、環境と情報収集と訓練の成果により、勝ち組になった。生涯収支も大幅に改善された。勝ち方が分かった。詳しく知りたい人は飲みながら話しましょう！（自慢話ですから）

その結果、引退を決意した。勝つ人は勝つべくして勝ち、負ける人は負けるべくして負ける。運の要素は、一日単位では振れ幅は大きいけど、年間に直せば、ツイてる日も、ツイてない日もあり、それも込みで成績に反映される。

なので、勝ち方も負け方も理解し、脳汁を超えた地点に至ったので（それなりに極めて）ヤめることができた。

最後の3年間でたくさん勝って、いい思い出をいっぱい作ってヤめることができた。ギャンブル依存症の

人がたくさん出るぐらい、脳汁の出してしまう魅力的なものをヤメてしまった今、それを超える楽しみはしばらく見出すことはできないのだと思う。毎日ニコニコ子育てをしていて、幸せであり、穏やかだけれど、脳汁は出ない。もう一生出ないだろうなー、出なくていいや。「俺は確かに熱い時間を過ごした。」という、これについては自信に満ちている。思い出してニヤニヤして過ごす、あと数十年してもニヤニヤできるネタである。同じ状況、時代には二度とならないから。

転機のきっかけは、友人宅に泊まった時にあった一冊の雑誌（DVD付）だった。
（コンビニにも売っているもので、決して怪しいものでも如何わしいものでもない）

（小話）

だいたい、先の読めないコロナウィルスによる緊急事態宣言の出ている中でお店がサービスする訳ないでしょうよ。

世間から文句を言われて非難に晒されても、「お店と従業員の雇用を守るため」に営業しているのであり、通常時よりも還元率が高い訳がない、確保で必死。常連で無い人が遠方から来るのであればサービスする訳ないでしょう、取れるだけ取る（回収）でしょう。

パチプロたちは廃業も考えながら、お店に行かないでしょう。勝つ見込みがないのに運勝負（期待値的には行くだけで負け）する訳がない。パチプロは廃業になるかな。

すなわち、こんな時にパチンコ屋に行っている人は依存症。コロナウィルスの感染に目を瞑っちゃうほどの依存症と私は判断している。

ただのパチンコ好きな人は、他の趣味に時間を使うなりコントロールできる、周囲の人に迷惑を掛けないように。

パチンコによるギャンブル依存症を無くすために、今この状況で行っている人たちこそパチンコから隔離してあげるべきだし、この人たちがいなければ成り立たない業界であるならば、「依存症の人たちに負けて成り立っている」というのは間違いではない。

人生の小さな転機③

2019年7月（42歳0か月） 「新しい緩やかな生活様式」

子どもが生まれた。妻の育休は1年の予定。小菅村の保育所は満2歳の4月（ウチの場合は2022年4月）から入所可能。ということで情報収集しながら話し合い、妻は予定どおりの7月に育休から復帰を予定し、保育所に預けるまでの期間は私が子守をするということで話を決めた。

そのため、自然文化誌研究会・木下養魚場の仕事を切らずに継続しながら子守をできる体制づくりをしてきた。

そしたら、コロナウィルスがはじまり、GWは中止、この原稿を書いている時点では確定してないが、夏の主催事業も厳しいことが予想されている。

2022年4月まであと700日なので、コロナウィルスの影響で仕事が無いことで給料が減っても、子育てという大義名分を掲げてのんびり暮らすことに決めた。決めないと、減る収入に対する不安に押しつぶされてしまう。

今回は他発的に仕事が減ってしまったのだが、一人前の稼ぎが必要な時ではない（むしろたくさん働くわけにはいかない）ので、自然文化誌研究会と私、木下養魚場と私の関係においては、従業員の雇用を気にしなくていいよ♪と、明るくいきましょう、と決めた。

子どもができたことで一番の変化は、近所を散歩するようになったことだ。雨が降らなければ毎日。一日に多い日は5回ぐらい散歩に連れていく。

賑やかさを求めるなら道の駅へ。ヤギもいる。見渡せば山に囲まれている。自画自賛できるぐらいいい環境

だ。何が良いて、そこまで厳しすぎない所かなあ。冒険するには物足りないけど暮らすにはちょうどいい。

子どもを抱っこして歩くペースになった。ゆっくり過ぎてカロリーを消費してなさそう。そのおかげで今まで気付かなかった収穫（物）がたくさんある。



（秋）近所のクリタケ



（春）近所のコシアブラ（毎日採れた）

きのこ、山菜が目に入る。こんな近所に、こんなにたくさんあるなんて、今まで知らなかった。宝が見えていなかった。

毎日ゆっくり定点観測をしているからだろうか？

この「ゆっくり」という視点は今まで無かった。山菜やきのこならサッサ採って調理して食べる。仕事はサッサ片づけて次のことをやる。イベントも行事もそうだ、スムーズに進めるのが正しい・・・。

「巧遅は拙速に如かず」（今 Web で調べた）が好きで、事務局はスピード勝負だし（？）、遅いのは嫌いだったから、真逆の時間の過ごし方をしているのだから 180 度方向転換に、まだ慣れないでいる。

とは言え、山菜ときのこについては、ただ知らなかっただけ。車という物理的手段と教わった場所という（安易な）経験則で、足元を見ていなかったんだなあ、と思う。でも理由が無ければこんなゆっくり歩かないで仕事をしたり、薪割りなどの生業がいくらでもあるからやはり効率良く動く方が好みだが。

あと 700 日、こんな感じで暮らして保育所に送り出し、バージョンアップして仕事に復帰するのが、これからの 2 年間のイメージなる。

脳汁は出ないけれども、楽しくぜいたくな暮らしの筈だと信じて。

このゴールデンウィークは貴重な経験となるだろう。社会の状況が変われば閑散としたゴールデンウィークにもなる訳で、いろいろ決めつけているけれども可能性は 0 ではないということだ。このようなゴールデンウィークを再び望むならば、無人島に行くぐらいしかないのかもしれないが（その無人島も混雑してるかもしれない）。

「光州 5・18」は 2007 年公開の韓国映画で、1980 年 5 月に光州市民がチョンドゥファン軍事政権に命を賭けて抵抗した蜂起戦を描いています。40 年前 5 月 27 日の学芸大、午後の講義が始まる前の教室で特殊教育研究部の O 君が「講義をボイコットし、韓国民衆に連帯して韓国大使館へ抗議に行こう！」と演説しました。熱く訴える彼の言葉に心が揺さぶられ、講義をサボって韓国大使館デモに生まれて初めて参加しました。この日以降紆余曲折はありますが闘う私の人生が始まり、当時光州市民が歌ったプリパ（根っこ派）の一節「膝をついて生きるよりは 立ったままで死のうじゃないか」は座右の銘になりました。何で 5 月 27 日のデモだったのか心の片隅にずっと引っかかっていたのですが、この映画を観て親友 O 君の熱き思いを悟ったのでした。あの日から 40 年、私は佐野川の畑で雑草・野生動物と闘い続けています。



・春の茶仕事

和田茶園は茶草場農法で大豆殻・藁等有機資材を畝間に敷き詰め、鶏糞・豚糞・油粕・米糠等有機肥料を施しています。年末に猪が茶樹の根元を掘り起こし、2 月下旬まで穴埋め作業をしました。木の下に潜って盛り上がった土を崩し、むき出しになった根を埋める作業で、毎日作業着と体は泥だらけです。つらい仕事でしたが、蔓草の地下茎をついでに抜き取ったのでこの夏の草取りは楽になるかもしれません。穴埋めが終わると春肥・春整枝作業と忙しい日が続きました。3 月の佐野川は 15 日と 29 日に雪が降りました。どちらも雨交じりの雪で、葉層の薄い茶園で雪の重みに押しつぶされた箇所を元へ戻す作業に数日かかりました。



世間ではコロナウイルス感染症が猛威を振るって緊急事態宣言が出され、相模原市も防災放送で人との接触を避けるよう連日呼びかけています。生き物相手の農家はテレワークより野良仕事が最優先です。一番茶摘採間近の藤野茶業部役員はマスクをして新芽の開き度を調べ、連休中も摘採日程を相談しています。今年も美味しい佐野川茶を消費者の皆様にお届けできるよう全力で準備していますので、新茶を楽しみにお待ちください。



・花卉栽培

佐野川は畑に防護柵を設置しても猪が突き破り猿はよじ登って侵入してくるので、野菜の収穫は期待できません。茶・雑穀に続く栽培品目に花卉を選びました。ガサツな私ですが、農業高校に勤めていた頃は食品製造部門を担当した1年間以外はずっと草花部門で花苗作りをし、失職後に2年間パート勤めした県立植物園でも花壇に植える花苗作りが仕事でした。生業としての花卉栽培は施設を使い栽培適期の数か月前に播種・育苗するので、温度管理や病害虫防除に細心の注意を払います。育苗施設を持たない私は育てやすい一年草を栽培し、切り花出荷を目指す事にしました。

昨秋孫娘農園と名付けた菜園に苗床を作り、カレンジェラを播種しました。100本程できた苗は順調に育ち、きれいな花を咲かせています。ご近所や親しい友人に差し上げていたのですが、藤野で毎月開かれるピオ市に初出店し販売する事にしました。5月ピオ市はコロナウイルス感染防止対策で無人販売でしたが、早朝収穫したカレンジェラはたくさんの方に買っていただき感激です！



前号で報告した新しい花卉畑は相模湖・ダム建設殉職者合同追悼会実行委員会の仲間に動物防護柵修理をお願いし、自宅でアスター・ヒマワリの育苗に取り組んでいます。軽トラ荷台を作業場にしてプラグトレイに播種、ベランダに並べて毎日灌水しています。



・雑穀街道普及会改め、雑穀栽培活動2020

3/15 発行「植物の人々の博物館メールマガジン」64号に記されたように、藤野では雑穀街道普及会活動の見直しが必要となりました。黒澤君と相談していますが INCH として雑穀街道普及会の在り方が定まるまで、上岩雑穀畑の様子は雑穀栽培活動として報告します。

2月の醤油仕込みワークショップ、6日・9日・16日・24日と醪の手入れを小まめに行いました。参加者と相談し、3月からは第1日曜日午前9時から手入れをしています。左は2/6、右が5/3の醪です。醤油になる様子、何回見てもワクワクします！



雑穀畑では麦が順調に育っています。茶の収穫が終わったら雑穀植え付けます。